

野口英世の生涯

6101ST



1876年に農家の長男として生まれましたが、母しかが畑仕事とで目をはなしていたら英世がいろりに落ち左手に大きな火傷を負いました。

それから小学校に入学しました。ですが、左手の火傷のせいでみんなに手ん棒とばかにされました。ですが、英世は勉強をしました。その結果、優秀な学生が先生の代わりに授

業をするという、「生長」になりました。

また、父親が酒飲みだったのもあり、清作(野口英世)の家は貧乏でありましたが、母シカの清作に対する熱い愛情と猪苗代高等小学校の先生である小林栄先生の私財を投げ打ってまでの援助があり、清作は何とか猪苗代高等小学校へ入学することができました。

高等小学校で、小学校時代にいじめをうけていたことを作文で発表をしたら、仲間が感動をして英世に援助をし現在の会津にある会陽医院という病院で左手の手術をうけました。

そのころ英世は、医学の素晴らしさを知り医学の道に進むことにしました。そのあと医学免許を取りに行くために上京しました。そして別れ際に

「志を得ざれば、再び此地を踏まず」

という言葉を残しました。

その後英世は、黄熱病の研究のため、エクアドルのグアヤキルに出張しました。その後英世は、黄熱病のさらなる研究のために、南米各地を回りました。ペルー、ブラジル、メキシコ、英世はここでも黄熱病の研究を行いました。しかし、英世は逆に黄熱病にかかり、51歳で、生涯を閉じました。

【修学旅行のまとめ】

修学旅行では、野口英世の生涯やどのようにして偉人になったのかが分かりました。

あと、野口英世青春館に行って英世が使っていた物や英世が書いた資料があつていろいろと見ることで良かったです。

また行きたいです。